

ストリップと COVID-19 の共生——「本質的に不健全」な芸能の現場

武藤大祐（群馬県立女子大学）

2020 年からの新型コロナウイルス感染拡大を受け、国が準備した持続化給付金等の支給対象から性風俗業者は除外された。派遣型風俗店の運営会社が起こした訴訟の口頭弁論において、国側は「性風俗業は本質的に不健全で、給付金の支給は国民の理解が得られない」と答弁し、職業差別を正当化した。風営法により「店舗型性風俗特殊営業」として扱われるストリップ劇場も例外ではない。

あらゆる舞台やイベントで中止あるいは開催制限が講じられる中、ストリップ劇場はその大半が 2020 年 4 月の第 1 回緊急事態宣言に伴い 4～5 月の二ヶ月弱を休館したのみである。他の様々な舞踊文化が、行政の施策や支援とともに、感染リスクを回避しつつ活動の持続可能性を探ることを課題としたのに対し、ストリップは感染リスクに直に晒されながら営業を続けることになった。

ストリップでは踊り子が 10 日単位で全国の劇場を移動し、その都度異なる 5 人前後で香盤が構成される。多くの場合、楽屋は共用である。客席数が 100 を超える劇場は少なく、入替制でないため、正午から深夜までの上演中、長時間滞在する観客も多い。このように感染リスクは決して低くない中、ストリップ劇場はいかなる対策を講じ、またいかなる影響を受けてきたのか。これについて石川（2021）は一人の踊り子への聞き取りを行っているが、本発表では主に参与観察と聞き取りによって調査し考察を加えたい。

経済的影響としては、外出自粛に伴う観客減少や、時短営業に伴うステージ数の減少がある。また観客層の中心であった高齢者が減少し、それと入れ替わるように若者や中年層の比率が増した。これは近年のストリップの客層の変化とも関連しているようだが、コロナ禍によるライブイベント全般の減少も関わっているようである。

他方、上演自体を質的に変化させる要素に注目するべきであろう。観客から踊り子へのチップの手渡し、写真撮影時の握手やツーショット、声を出しての応援などが感染対策として禁止されたことは特に重要である。ストリップにおいては観客と演者からなる「交感の場の総体」が「官能性」を支えるのであり（Prakash 2022）、こうした交流の阻害は美学的にも経済的にも過小評価できない。翻っていえば、コロナ禍はそのようなストリップの特性を改めて浮彫りにしたのである。

参考文献

石川良子 (2021) 「コロナ禍のもとのストリップ」、『日本オーラル・ヒストリー研究』17: 155-166。

Prakash, Brahma (2022) The Erotic Power of the Dancer, *South Asian History and Culture* 14(2): 186-201.